

研究授業「保育職基礎演習」の実施

柴 田 玲 子

Reflections on an Early Child Care Education: Basic Seminar Open Class

Reiko Shibata

Abstract

This paper reports on an Early Child Care Education: Basic Seminar II open class held in 2011. This series of lectures was originally developed by the Department of Early Childhood Education at Takamatsu Junior College and is taken over by all the staff. The Basic Seminar I, held in the first term, focused mainly on each staff member's field of specialization. The Basic Seminar II, however, was founded on the underlying concept of early childhood education based on each teacher's field of research, and was taught in several seminar groups with only a small number of students in each. The final class in this series of open classes was held as a lecture open to all college students, with the aim of heightening their awareness of young children's expressions and emotions.

Key words : expression, emotions.

要約

本稿は、平成23年度第2回保育学科研究授業「保育職基礎演習Ⅱ」の実施報告である。保育職基礎演習は本学が独自に設定した科目で、保育学科全教員が担当する。前期に開講した基礎演習Ⅰは教員の専門領域に基づくオムニバス形式で進められたが、基礎演習Ⅱでは、少人数の選択ゼミ形式でそれぞれの教員の専門分野から「保育」という共通テーマを考えてきた。この研究授業はその最終回として学生全員に対する講義形式で実施した。子どもの表現、感性への関心を高めることをめざしている。

キーワード：表現、感性

* 提出年月日2012年6月30日、高松短期大学保育学科教授

1. 研究授業の日程

研究授業および検討会は次の日程で行われた。

〈研究授業〉

日 時：2012年1月24日（火）3校時 13時00分～14時30分

場 所：2106講義室

授業科目：保育職基礎演習Ⅱ

参 加 者：他学科教員を含めて 9名

〈検討会〉

日 時：2012年1月24日（火）5校時 16時20分～17時50分

場 所：2201演習室

参 加 者：保育学科教員 8名

2. 「保育職基礎演習Ⅱ」の授業について（本学シラバスより抜粋）

【担当教員】 保育学科教員全員

【授業の紹介】

前期の学びに引き続き、「保育者（先生）として絶対に求められるもの」について考え・体得する科目が、保育職基礎演習です。

子どもたちや保護者から信頼される保育者になるためには、確かに保育の専門的知識・技能は大切です。しかし、それだけにとどまりません。保育に対する情熱や真摯な態度を目に見える形で表明できる意志もみなさんに求められるのです。こうした情熱や態度について、みなさんと徹底的に向き合っていきます。

【教育目標】

保育実習・幼稚園教育実習で実りある学びにするために、専門職保育者に必須の基礎的かつ総合的な資質能力を、1年次において系統的に学びます。

【授業計画】

第1回 後期を迎えるにあたって心得ておくこと

第2回～第3回 保育実践活動—大学祭準備

第4回～第8回 実践的課題研究A（5回連続講座）

第9回 冬休み・保育実習Ⅰを迎えるにあたって心得ておくこと

第10回～第14回 実践的課題研究B（5回連続講座）

第15回 まとめ

【授業時間外の学習】

授業時間外は、授業において学んだ「保育者（先生）を目指す保育学生として、ふさわしい服装・言葉づかいや立ち居振る舞い」を実践する時間です。みなさん一人ひとりが、保育者を目指す保育学生であることを目に見える形で表明し続けてください。

【成績の評価】

授業科目の性質上、他の授業科目と異なり、12回以上の出席（遅刻・早退は出席とみなさない）をもって評価対象の学生として位置づけます。

評価は、提出課題の内容と試験結果を総合的に判断します。

3. 学習者の状態

本時は基礎演習Ⅱの15回目、最後のまとめとして実施した。本学が独自に設定した卒業必修科目であるため、保育学科1年生86名全員が履修中である。学生は基礎的な1年間のカリキュラムを終えようとしているところであり、次週より保育実習に入る予定で、実習直前の緊張感や不安を持って毎日を過ごしている。本学では「観察参加実習」として、10月から毎週火曜日午前中は1年生全員が幼稚園で過ごしてきた。子どもに触れる機会を作っているため、1年生であっても、各専門科目の講義の内容を、多少は自分の経験の中から事例と結び付けて実感できるようになってきた段階ではないかと推察される。

4. 設定した主題

「豊かな感性」という言葉は、保育所保育指針・幼稚園教育要領の随所に用いられ、子どもとの関わりにおいて注目すべき観点である。学生も何気なく「感性」と口にするが、この意味深い言葉についてどの程度考えたことがあるのか、おそらく、関心を持ったことさえないまま曖昧に使っていると思われる。授業者の専門は「音楽—作曲」であり「感性」や「表現」の研究が深いわけではないが、「保育者として絶対に求められるもの」を1年間考えてきたこの科目の「まとめ」を担当するにあたって、少しでもその部分にアプロー

チできればという思いから、あえてこの題材を取り上げることにした。子どもの表現の多様性、それを受け止めることや返してやることの重要性を（次週から出向く）保育現場で実感してほしい。そのために、自らの感性に気付き、求められている「豊かな感性」とはどのようなものであるのかについて考える機会としたい。

5. 指導案

保育職基礎演習Ⅱ 第15講 指導案

平成24年1月24日

「子どもの表現」と「感性」について考えてみよう

I 本時のねらい

- ・ 保育実習を前にして、保育指針の一部ではあるが、目を通す機会とする
- ・ 子どもの表現の多様性を知り、実習で実感できる基礎とする
- ・ 感性とは何か、アウトラインを把握し、自らの感性について考える

II 使用資料・教材

- ・ 学習シート（後掲）
- ・ 保育所保育指針 ・ 保育指針を基にしたワークシート（後掲）
- ・ 保育指針表現領域の内容を
「表現・感性・音楽の面からどのように解釈できるか」の表（後掲）

III 授業の流れ

	内 容	指導上の留意点
13:00	（学習シート配布） 指針の文（2行）を書き写す。	指針を持参したかの確認。 本日のテーマである表現・感性という言葉に注目させる。
13:05	「自然」への感性 アンケート記入。 周囲の友達と見せ合い、話し合う。 （次のワークシート配布）	少しだけ「自然」に目を向けさせると共に、 後で感性について考える時の具体例とする。 感性の多様性・独自性、共感体験。
13:25	表現とは何か。	子どもの行為、存在そのものが表現であることに気付かせる。

13:35	指針を参照しながらワークシートを完成する。 (資料配布)	(黒以外の色で文字を記入させる) 表現とは何か、感性とは何かを考える手掛かりとして指針の中にある言葉を拾い、注目する。
13:55	感性とは何か、六つの態様について。	ここでは特に「感性」のアウトラインをつかませたい。
14:05	「表現」の内容 読み取り方の例 配布資料を用いてその一部を説明する。	この資料、最初のアンケートなど具体的な例から表現・感性を少しでも把握させたい。
14:15	一人ひとりの子どもはどれだけ貴重な存在か。	本日のまとめ。実習への期待・激励。

6. 授業を実施して

(1) 主題の設定について

「表現、感性」という奥深い内容を90分で語ることの無謀さを承知のうえで、しかし、どうしてもこの時期にという思いから授業を構成した。主題をどう整理してどこに焦点を絞るかについて検討を重ねた結果の指導案であるが、やはり、まだ盛りだくさんすぎた感是否めない。配布した資料については、時間をかけて十分に活用することができなかったという点で反省している。

学生にとっては、普段考えたことのなかった自らの感性をわずかながら自覚し、人とは違う独自のものであることに気付く機会となったと思われる。子どもの感性から感動が湧きあがり、それを様々に表現するが、それを受け止めて共感し、返してやらなければ表現にならない。保育者や他の子どもの感性によってその循環は強化される。このような話の中から「豊かな感性」や「子どもの表現」に気付く注意力の必要性を感じとってほしかったが、十分に達成できたとはいえない。しかし、子どもに接した時や指針を見直した時などに何らかの形であらためて考えるきっかけぐらいにはなったのではないだろうか。

(2) 授業の流れについて

保育指針が手元にない学生が思いのほか多く、関連の作業を順調に進めることが難しかった。指針を参照しなくてもある程度は記入できるような方法に変更しながら、時間配分も調整して、ほぼ予定した内容を終えたが、前項で述べたような問題点が残る。検討会

で指摘された次のような点については、授業を進めながら時間の不足を感じ、迷いがあった部分であり、計画を立案する段階での読みが適当ではなかったと思われる。

まず、授業の冒頭、「自然」への感性に関するアンケート記入と話し合いの状況である。学生は思いのほか興味を持って取り組み、かなり考えた上で、自分なりの表現で言葉を選んで記入しているように見えた。また、友達と見比べさせた時には、自分が思いつきもしなかった表現、しかしながら言われてみれば十分に共感できる表現に驚き、大いに盛り上がりを見せてくれた。その盛り上がりを受けて（予定してはいなかったのだが）いくつかのグループに、そのグループ内で一番と評価された表現を発表させることでクラス全員の共有を図った。しかし、展開はそこで終わってしまったのである。一人ひとり独自の感性を持っていることへの気づきは授業者の目論見通りだったが、それをもっと拾い上げて話を広げ、深めていくことが望ましいのではないかというご意見をいただいた。保育者に必要な「自然事象への関心」はこういう働きかけからも高まることが期待できる。ここに時間をかけて、次の「表現とは何か」に話題を移し、子どもの表現に気付かせる、そして、学生たちが観察参加で子どもに関わった経験から感じたことを話し合わせる、そういう流れが次の実習につながっていく。ワークシートや資料を配布せずに「感性」へと進める授業の構成もできたのではないと思う。

次に、上のことにも関係してくるが、後半に配布した資料の扱いについて「より有効な活用を」と、ご指摘いただいた。保育指針 領域「表現」の内容について、授業者はどう読み取ったかを表にして示した資料である。特に「音楽の立場からのアプローチ」欄は授業者の専門領域であることから付記した。指針を読み返してほしいという思いから作成した表であるが、時間配分上、最初から10分しかとっていなかったのが問題であった。事実上、配布しただけに終わったに近い。一部でも取り上げて授業者の口から伝えるべきというのは当然の指摘であり、反省点である。

授業最後の15分間は、本日の主題から離れて、これから実習に入る学生たちにエールをおくる意味で「一人ひとりの子どもはどれだけ貴重な存在か」という話をした。実習の場で学生はよく「子どもたち」という十把ひとからげの言葉を使う。それを使うのがいけないのではないが、保護者、特に母親からすれば我が子は何者にも代え難い宝物であることを考え、一人ひとりを見つめていかなければならない。子どもをさずかったことが判明した瞬間から夫婦は父と母になる。何事においてもお腹の赤ちゃんが優先する10ヶ月を経

て、母親は命をかけて出産に臨む。どんなに痛くても自分より赤ちゃんの命の方が気にかかるのが母親、そんな思いをしてまで産んだ我が子を片時も離したくない。しかし、いろいろな事情で施設や保育園に預けざるを得ないのである。そんなお母さんからあなたは赤ちゃんを責任持って預かることができる？ というような問いかけをしたことに対して学生はこの時間中で一番真剣に聞いてくれたように思う。何か少しでも心に響いたとすれば、次週からの実習で子どもを見るまなざしがやわらかくなるのではないだろうか。

研究授業を終えた今、改めて客観的に指導案を見ると、左半分の内容はその一つひとつに90分を費やしてもおかしくないものが並んでいることに、自分で驚いている。この難しい内容を、ここまでコンパクトに詰め込んで、学生には分かりにくい部分があったのではないかと危惧している。しかしその一方で、学生が記入した学習シートを見ると、表現や感性についての的確な記述や予想以上の反応を見せてくれているものもある。実習など、子どもたちとの触れ合いの機会に、「子どもの表現に気付き、返してやれる人、自らが豊かな感性を持つ人」という言葉を思い出し、実践に結び付けてくれることを期待する。

7. おわりに

保育の専門家をはじめ、より保育に近い研究者の先生方を差し置いて、門外漢に等しい私が保育内容について語るなど、本来なら考えられないことが実現してしまいました。私にとっては非常に有意義な体験だったと思っています。ご参観いただき、そして遅い時間の検討会にもお付き合いいただきました先生方にこの場を借りて心よりお礼を申し上げます。検討会、参観記録を通して、貴重なご意見や励ましの言葉、ご感想など、多くのご指導をいただきましたこと、今後の授業や学生対応に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

引用・参考文献

遠藤友麗（2009）いま感性教育に問われるもの 心と知と感性「五育のすすめ」教育と医学 2009年1月号、慶應義塾大学出版会

＊ 以下の資料は授業時に配布した学習シートと資料である。

（ ）に語句を記入したものは参観者に追加配布したものであり、授業者の意図を示す資料として重ねて掲載する。

保育職基礎演習Ⅱ ⑮学習シート

学籍番号 () 氏 名 ()

所属研究室 () 評 価

「子どもの表現」と「感性」について考えてみよう

課題：次の各項目について、指示に従い、すべて記述しなさい。

1. 保育指針、いわゆる 5 領域「表現」の最初にある 2 行の文を書き写しましょう。

2. それぞれについて、自分なりに表現してみましょう。自然事象（季節、風景、気象、動植物など）で考えるものとします。

美しいなあと思うもの 何のどんな様子が美しい？	
感動して涙が出そうになるもの どんな状況に感動する？	
自然にある色で好きな色 ○○のような○○色	
春の兆しを感じること、もの 今は冬、でも、2月頃になれば どこかに春が・・ 2種類答えて下さい	

3. 友達の表現を読んで、「なるほど、自分もそう思う」と思えたものを2つメモしておきましょう。

あなたの表現は友達に共感してもらえましたか？（○をつける） はい ・ いいえ

4. 感性とは何か → () や () を感じる力

具体的には、分類法の一つである、遠藤友麗氏による「六つの態様」が分かりやすいので見ていきましょう。

① () 的感性	生命観、命の尊さや慈しみ、悠久の命などを感じ取る感性
② () 的感性	よさや美しさ、情趣など、美の価値を感じ取る感性
③ () 的感性	知的好奇心、知の気づき、神秘・不思議を感じ取る感性
④ () 的感性	人情・愛情・哀しみなど人の気持ちや心を感じ取る感性
⑤ () 的感性	人間関係や社会に生きる人間としての調和感覚・他者に対する心遣いや配慮など、集団や社会の中で他者と自分とのよりよい関わりを感じ取る道徳的・倫理的感性
⑥ () 的感性	新しいことや本質的なことに気付いたり発見したり、おもしろいことや楽しい工夫などが直感的にひらめいたりする感性

これらの「感性」が急速に発動された時にわき上がる感情が「感動」であり、子どもは心に「感動」が起こった時に「表現」します。

MEMO

本日は表現や感性について少しだけ考えました。保育所の子どもたちや施設の利用者さんたちの心に寄り添うことができそうですか？ 実習直前のあなたの決意を含めて、本日の学びをまとめましょう。

学籍番号 () 氏名 ()

4. 感性とは何か → (心) や (価値) を感じる力

具体的には、分類法の一つである、遠藤友麗氏による「六つの態様」が分かりやすいので見ていきましょう。

① (生命) 的感性	生命観、命の尊さや慈しみ、悠久の命などを感じ取る感性
② (美) 的感性	よさや美しさ、情趣など、美の価値を感じ取る感性
③ (知) 的感性	知的好奇心、知の気づき、神秘・不思議を感じ取る感性
④ (心情) 的感性	人情・愛情・哀しみなど人の気持ちや心を感じ取る感性
⑤ (社会) 的感性	人間関係や社会に生きる人間としての調和感覚・他者に対する心遣いや配慮など、集団や社会の中で他者と自分とのよりよい関わりを感じ取る道徳的・倫理的感性
⑥ (創造) 的感性	新しいことや本質的なことに気付いたり発見したり、おもしろいことや楽しい工夫などが直感的にひらめいたりする感性

これらの「感性」が急速に発動された時にわき上がる感情が「感動」であり、子どもは心に「感動」が起こった時に「表現」します。

MEMO

本日は表現や感性について少しだけ考えました。保育所の子どもたちや施設の利用者さんたちの心に寄り添うことができそうですか？ 実習直前のあなたの決意を含めて、本日の学びをまとめましょう。

学籍番号 () 氏名 ()

保育所保育指針より

(表現と感性に関する記述)

第1章 総則

3 保育の原理 (1) 保育の目標

- ア— (ウ) 人との関わりの中で、人に対する () と ()、そして () を大切にする心を育てるとともに、自主、自立、及び () の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと。
- (エ) ()、() 及び () の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと。
- (オ) 生活の中で、() への興味や関心を育て、話したり、聞いたり、相手の話を理解しようとするなど、() を養うこと。
- (カ) 様々な体験を通して、豊かな () や () を育み、() の芽生えを培うこと。

第2章 子どもの発達

子どもは、様々な () との相互作用により発達していく。～ 特に大切なのは、人との関わりであり、愛情豊かで思慮深い大人による保護や世話などを通して、大人と子どもの相互の関わりが十分に行われることが重要である。この関係を起点として、次第に () との間でも相互に働きかけ、関わりを深め、() と () を形成していくのである。～

1 乳幼児期の発達の特性

- (1) 子どもは大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることにより、() が安定するとともに、() が育つ。そして、身近な環境(人、自然、事物、出来事など)に () や () を持ち、自発的に働きかけるなど、次第に () が芽生える。
- (6) 乳幼児期は、生涯にわたる () の基礎が培われる時期であり、特に () を伴う多様な経験が積み重なることにより、() とともに ()、探究心や思考力が養われる。～

2 発達過程

- (1) おおむね6か月未満
～ 手足の動きが活発になり、その後、寝返り、腹ばいなど全身の動きが活発になる。視覚、聴覚などの感覚の発達はめざましく、泣く、笑うなどの () や ()、() などで自分の欲求を表現し、これに応答的に関わる特定の大人との間に () が形成される。
- (2) おおむね6か月から1歳3か月未満
～ 特定の大人との応答的な関わりにより、情緒的な絆が深まり、あやしてもらったり喜ぶなどやり取りが盛んになる一方で、() をするようになる。また、身近な大人との関係の中で、自分の () や () を () など で伝えようとし、大人から自分に向けられた気持ちや簡単な言葉が分かるようになる。

(3) おおむね1歳3か月から2歳未満

歩き始め、手を使い、言葉を話すようになることにより、身近な人や身の回りの物に（ ）に働きかけていく。 ～ 大人の言うことが分かるようになり、自分の（ ）を親しい大人に伝えたいという欲求が高まる。（ ）、（ ）、（ ）などを盛んに使うようになり、（ ）を話し始める。

(4) おおむね2歳

～ 発声が明瞭になり、語彙も著しく増加し、自分の意思や欲求を（ ）で表出できるようになる。 ～ 自我の育ちの表われとして、強く（ ）する姿が見られる。 ～

(6) おおむね4歳

～ 感情が豊かになり、（ ）の気持ちを察し、少しずつ（ ）の気持ちを抑えられたり、（ ）ができるようになってくる。

第3章 保育の内容

1 保育のねらい及び内容

(1) 養護に関わるねらい及び内容

イ 情緒の安定

(ア) ねらい ② 一人ひとりの子どもが、（ ）を（ ）して表すことができるようにする。

(イ) 内容 ① ～ 子どもの（ ）を適切に満たしながら、（ ）な触れ合いや言葉がけを行う。

② 一人ひとりの子どもの気持ちを（ ）し、（ ）しながら、子どもとの継続的な信頼関係を築いていく。

(2) 教育に関わるねらい及び内容

ア 健康

(ア) ねらい ① 明るく伸び伸びと（ ）し、充実感を味わう。

(イ) 内容 ① 保育士等や友だちと（ ）、安定感を持って生活する。

イ 人間関係

(ア) ねらい ② 身近な人と親しみ、（ ）を深め、愛情や信頼感を持つ。

(イ) 内容 ① （ ）できる保育士等との関係の下で、身近な大人や友達に関心を持ち、（ ）して遊んだり、親しみを持って自ら関わろうとする。

⑤ 友達と積極的に関わりながら、喜びや悲しみを（ ）し合う。

⑥ 自分の（ ）を相手に伝え、相手の思っていることに（ ）。

ウ 環境

- (ア) ねらい ① 身近な環境に親しみ（ ）と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ。
- ② 身近な環境に（ ）から関わり、（ ）を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (イ) 内容 ① 安心できる（ ）及び（ ）環境の下で、聞く、見る、触れる、嗅ぐ、味わうなどの（ ）の働きを豊かにする。
- ③ 自然に触れて（ ）し、その（ ）、（ ）、（ ）などに気付く。
- ⑤ （ ）により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。

エ 言葉

- (ア) ねらい ① 自分の（ ）を言葉で表現する楽しさを味わう。
- (イ) 内容 ④ （ ）こと、（ ）こと、（ ）こと、味わったこと、（ ）こと、（ ）ことを自分なりに言葉で表現する。
- ⑤ （ ）こと、（ ）ことを言葉で表現したり、（ ）ことを尋ねたりする。
- ⑨ 生活の中で言葉の（ ）や（ ）に気付く。
- ⑩ いろいろな体験を通じて（ ）や言葉を豊かにする。

オ 表現

- （ ）ことや（ ）ことを（ ）に表現することを通して、豊かな（ ）や（ ）する力を養い、（ ）を豊かにする。
- (ア) ねらい ① いろいろな物の（ ）などに対する（ ）を持つ。
- ② （ ）ことや（ ）ことを（ ）に（ ）して楽しむ。
- ③ （ ）の中で（ ）を豊かにし、様々な（ ）を楽しむ。
- (イ) 内容 別紙の表 参照

保育所保育指針より

(表現と感性に関する記述)

第1章 総則

3 保育の原理 (1) 保育の目標

- アー(ウ) 人との関わりの中で、人に対する(愛情)と(信頼感)、そして(人権)を大切にする心を育てるとともに、自主、自立、及び(協調)の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと。
- (エ)(生命)、(自然)及び(社会)の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと。
- (オ) 生活の中で、(言葉)への興味や関心を育て、話したり、聞いたり、相手の話を理解しようとするなど、(言葉の豊かさ)を養うこと。
- (カ) 様々な体験を通して、豊かな(感性)や(表現力)を育み、(創造性)の芽生えを培うこと。

第2章 子どもの発達

子どもは、様々な(環境)との相互作用により発達していく。～特に大切なのは、人との関わりであり、愛情豊かで思慮深い大人による保護や世話などを通して、大人と子どもの相互の関わりが十分に行われることが重要である。この関係を起点として、次第に(他の子ども)との間でも相互に働きかけ、関わりを深め、(人への信頼感)と(自己の主体性)を形成していくのである。～

1 乳幼児期の発達の特性

- (1) 子どもは大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることにより、(情緒)が安定するとともに、(人への信頼感)が育つ。そして、身近な環境(人、自然、事物、出来事など)に(興味)や(関心)を持ち、自発的に働きかけるなど、次第に(自我)が芽生える。
- (6) 乳幼児期は、生涯にわたる(生きる力)の基礎が培われる時期であり、特に(身体感覚)を伴う多様な経験が積み重なることにより、(豊かな感性)とともに(好奇心)、探究心や思考力が養われる。～

2 発達過程

- (1) おおむね6か月未満
- ～手足の動きが活発になり、その後、寝返り、腹ばいなど全身の動きが活発になる。視覚、聴覚などの感覚の発達はめざましく、泣く、笑うなどの(表情の変化)や(体の動き)、(喃語)などで自分の欲求を表現し、これに応答的に関わる特定の大人との間に(情緒的な絆)が形成される。
- (2) おおむね6か月から1歳3か月未満
- ～特定の大人との応答的な関わりにより、情緒的な絆が深まり、あやしてもらおうと喜ぶなどやり取りが盛んになる一方で、(人見知り)をするようになる。また、身近な大人との関係の中で、自分の(意思)や(欲求)を(身振り)などで伝えようとし、大人から自分に向けられた気持ちや簡単な言葉が分かるようになる。

(3) おおむね1歳3か月から2歳未満

歩き始め、手を使い、言葉を話すようになることにより、身近な人や身の回りの物に（自発的）に働きかけていく。～大人の言うことが分かるようになり、自分の（意思）を親しい大人に伝えたいという欲求が高まる。（指差し）、（身振り）、（片言）などを盛んに使うようになり、（二語文）を話し始める。

(4) おおむね2歳

～発声が明瞭になり、語彙も著しく増加し、自分の意思や欲求を（言葉）で表出できるようになる。～自我の育ちの表われとして、強く（自己主張）する姿が見られる。～

(6) おおむね4歳

～感情が豊かになり、（身近な人）の気持ちを察し、少しずつ（自分）の気持ちを抑えられたり、（我慢）ができるようになってくる。

第3章 保育の内容

1 保育のねらい及び内容

(1) 養護に関わるねらい及び内容

イ 情緒の安定

(ア) ねらい ② 一人ひとりの子どもが、（自分の気持ち）を（安心）して表すことができるようにする。

(イ) 内容 ① ～子どもの（欲求）を適切に満たしながら、（応答的）な触れ合いや言葉がけを行う。

② 一人ひとりの子どもの気持ちを（受容）し、（共感）しながら、子どもとの継続的な信頼関係を築いていく。

(2) 教育に関わるねらい及び内容

ア 健康

(ア) ねらい ① 明るく伸び伸びと（行動）し、充実感を味わう。

(イ) 内容 ① 保育士等や友だちと（触れ合い）、安定感を持って生活する。

イ 人間関係

(ア) ねらい ② 身近な人と親しみ、（関わり）を深め、愛情や信頼感を持つ。

(イ) 内容 ① （安心）できる保育士等との関係の下で、身近な大人や友達に関心を持ち、（模倣）して遊んだり、親しみを持って自ら関わろうとする。

⑤ 友達と積極的に関わりながら、喜びや悲しみを（共感）し合う。

⑥ 自分の（思ったこと）を相手に伝え、相手の思っていることに（気付く）。

ウ 環境

- (ア) ねらい ① 身近な環境に親しみ（ 自然 ）と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ。
- ② 身近な環境に（ 自分 ）から関わり、（ 発見 ）を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (イ) 内容 ① 安心できる（ 人的 ）及び（ 物的 ）環境の下で、聞く、見る、触れる、嗅ぐ、味わうなどの（ 感覚 ）の働きを豊かにする。
- ③ 自然に触れて（ 生活 ）し、その（ 大きさ ）、（ 美しさ ）、（ 不思議さ ）などに気付く。
- ⑤ （ 季節 ）により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。

エ 言葉

- (ア) ねらい ① 自分の（ 気持ち ）を言葉で表現する楽しさを味わう。
- (イ) 内容 ④ （ した ）こと、（ 見た ）こと、（ 聞いた ）こと、味わったこと、（ 感じた ）こと、（ 考えた ）ことを自分なりに言葉で表現する。
- ⑤ （ したい ）こと、（ してほしい ）ことを言葉で表現したり、（ 分からない ）ことを尋ねたりする。
- ⑨ 生活の中で言葉の（ 楽しさ ）や（ 美しさ ）に気付く。
- ⑩ いろいろな体験を通じて（ イメージ ）や言葉を豊かにする。

オ 表現

（ 感じた ）ことや（ 考えた ）ことを（ 自分なり ）に表現することを通して、豊かな（ 感性 ）や（ 表現 ）する力を養い、（ 創造性 ）を豊かにする。

- (ア) ねらい ① いろいろな物の（ 美しさ ）などに対する（ 豊かな感性 ）を持つ。
- ② （ 感じた ）ことや（ 考えた ）ことを（ 自分なり ）に（ 表現 ）して楽しむ。
- ③ （ 生活 ）の中で（ イメージ ）を豊かにし、様々な（ 表現 ）を楽しむ。

- (イ) 内容 別紙の表 参照

保育指針 領域「表現」の内容（読み取り方の一例）

指針の本文	どのように表現するか	感性はどのように育まれるか	音楽の立場からのアプローチ
①水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ。	水の冷たさに歓声を上げたり、ぬるぬるした泥に熱中したりと、最初は恐る恐る、触れてしまうと、その喜びを全身で表現する。	自分にとって新しい素材の感触を発見することは感動体験、それを楽しむうちに工夫がひらめく。	素材に触れる時、状況によりいろいろな音がすることに気付き、擬音語を口にしてそのリズムを楽しむ。触れて楽しい時に何気なく口をついて出る言葉から歌ができる。
②保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ。	ゆるやかなわらべうたは安心して表現できる背景となる。自分も同じように表現したいという気持ちになり、真似ようとする。	自分に寄り添ってくれている保育士等の心を感じる。手遊びや季節の歌はそれぞれの事象に対する好奇心をひらく。	保育士の歌が繰り返されると、リズムを楽しみ、興味を持って覚え、部分的に声を出すようになる。身振り手振りを真似て楽しみ、一緒に歌おうとする。全身のリズム感が育まれる。
③生活の中で様々な音、色、形、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ。	様々なものの面白さや不思議さに気付く、誰かに伝えようとする。耳をそばだてたり視線を動かしたり、突然動かなくなったり、小さな気付きを確認しようというようになしぐさが見られる。	身近な環境から直接、五感をフルに働かせて発見した事象は感動的である。その喜びが様々な気付きへの意欲と敏感さを育む。	聞こえてくる音に敏感になる。聞こえる音のリズムに無意識で同調していることもある。音以外の要素も、音楽を伴った形の方がイメージしやすいものがある。
④生活の中で様々な出来事に触れ、イメージを豊かにする。	環境との関わりによる心の動きを表情やしぐさ、泣き声、そして言葉で表現する。（自分の表現も併せて一つのイメージとして心に蓄積する。）イメージの蓄積は新しい体験で活かされ、豊かな表現力の基礎となる。	様々な出来事で様々な感覚や感情を体験すると、自分が体験した内容はイメージとして心に蓄積される。それにより、目に見えない心の動き、例えば喜び、悲しみ、怒りなどをイメージできるようになる。	様々な出来事の中の音楽的要素は総合的イメージとして記憶され、思い出す時にはまずその部分から出てくる。また、心に持つイメージは、何か音楽を聴いた時にそれと重なるものに気付き、音楽的感動を経験できる。

指針の本文	どのように表現するか	感性はどのように育まれるか	音楽の立場からのアプローチ
⑤様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。	言葉で伝えようとするとするが、それ以外にも歓声をあげたり身振りでアピール、じっと見つめたまま動かなかったりなど。	自分の感動が相手に受け入れられ共有できたことで、さらに感動は深まり、その喜びから、また新しいことを発見する意欲を持つ。	感動を伝える時には自然にテンションが上がり、言葉や身振り手振りの抑揚が大きくなる。それによって周りの人も共感しやすくなる。そして、感動の抑揚からリズムやメロディーが発生する。
⑥感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にいかいたり、つくったりする。	顔の表情や身振りなど身体全体で、あるいは音や色、形を仲立ちにして、自由な発想で表現を楽しむ。	自由な発想や独自の工夫を認めてもらえようと、表現意欲が高まり、その材料となる感動に敏感になる。	声を出したり何かを鳴らしたりすることはもちろん、身体表現や造形表現の中にもリズムがあり、総合的に表出されたものの中には音楽の要素が大きい。
⑦いろいろな素材や用具に親しみ、工夫して遊ぶ。	様々な素材を自分なりの表現の材料として利用する。素材の特性に気付き、それを生かした使い方を工夫する。	自然物の素材からは、その感触や色、香り、季節を感じることが多い。たくさんの素材に、直に触れる体験が感性につながる。	身のまわりのものをすべてを素材として、広い意味での「楽器」を作って遊ぶ。遊びの中では（楽器遊び以外も含めて）リズムが生まれる。
⑧音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。	音が出るものに会おうといろいろな音を出して楽しむ。音楽に合わせて歌い、体を動かす。音楽で自分の気持ちを表現する。	聴覚が敏感な時期、音色の心地よさ、美しさに心を動かし、音の多彩さに興味を持って、想像を巡らせる。	音楽を聴くことも含めて、環境を整えることによって様々な音楽体験をする。上手下手でなく、思いのままに歌ったり、友達と楽器を使って表現を工夫したりといった楽しさを味わう。
⑨かいたり、つくったりすることを楽しみ、それを遊びに使ったり、飾ったりする。	イメージをいかいたりつくったりして表現し、それを何かに見立てて遊ぶ。そこで友達とイメージを共有、さらに表現の工夫をする。	素材に触れて楽しみ、線や色、形を自分で作れること、色の変化などに感動し、自分なりのこだわりで美しいものを求める。	造形表現と音楽表現は別個のものではなく総合的活動として展開する。歌いながら描く、描きながら首をふるなど、楽しみの中にイメージを広げる。
⑩自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう。	興味深い場面に会おうとそれを再現しようとする。ごっこ遊びとして出現し、劇遊びに発展する。	ごっこ遊びを楽しむためには観察力が求められる。鋭い観察で得た情報を思い出すという段階があってこそその再現となる。	劇遊びも総合的活動である。おはなしを作り、自ら演じようとしたり、背景も自分たちで作ったりする。感動が高まると、自然にセリフから歌が生まれ、音楽劇に近づく。

研 究 紀 要

第58・59合併号

平成25年 2 月25日 印刷

平成25年 2 月28日 発行

編集発行

高 松 大 学

高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841-3255

FAX (087) 841-3064

印 刷

株式会社 美巧社

高松市多賀町 1 - 8 - 10

TEL (087) 833-5811